



追悼抄

10月

「平和利用」熱く追求

原子力の安全に尽力
田島 英三さん
(10月10日死去、85歳)

▲思えば、私の生きて来た時代は、原爆と原子力の時代であった。三年前に刊行された自伝「ある原子物理学者の生涯」(新人物往来社)を、田島さんはこう結んだ。

理化学研究所の仁科芳雄研究室で核開発に関係した

テーマに取り組み、終戦直後は広島・長崎の被爆地調査、原子力の平和利用時代に入ると、国の原子力委員、原子力安全委員に。立教大学教授としても、放射線物理という新しい領域を日本に根付かせた。

エピソードに事欠かない人だった。一九七三年、当

時の森山欽司原子力委員長(科学技術庁長官、故人)の強硬路線に反発し、原子力委員を辞任。「原子力委員の職責を果たすことが困難」と、たたきつけるような辞表だった。

日本の原子力開発のあるべき道は、推進一本やりではなく、安全・環境に力点を置いた施策を検討すべきだというのが、一貫した主張であった。

その翌年に起きた原子力船「むつ」の放射線漏れによる漂流事件は、国の原子力行政の独断専行、地元無視の典型として忘れられない。漁民団体の要請で波浪にもまれる「むつ」を船内調査、青森県に帰港しても

問題ないとの説明が納得を得て、事態は収拾された。

漁師の「田島先生なら信用できる」という言葉に、胸が熱くなったという。七八年に発足した原子力安全委員会の委員に就任してから九年間、原発立地の安全確認など原子力開発

の安全確認など原子力開発の安全確認など原子力開発

チェックの中心的役割を果たし、財団法人原子力安全研究協会理事長に転じた。五十年近い付き合いという森一久日本原子力産業会

議副会長は「時代の求めでしようか、国内外でいつも引っぱり出されていた。ふだんは温厚ですが、基本が曲げられるとなると譲らない芯の強さを秘めていた方でした」と惜しむ。

冒頭の自伝を自ら英訳中だったが、「十数」を残し、前立腺がんで逝った。

(大西 正夫)



安全な原子力に情熱を注いだ田島さん (91年6月)



White Lily



謹啓 本日はご多忙中にもかかわらず田島英三の
お別れの会にご出席を賜り誠に有難うございました
こうして皆様にお集まり頂き故人もさぞやよろこんで
いることと存じます
長年にわたる故人に対するお心遣いの数々 また私ど
もに対するお慰めとお励ましの言葉など有難く深く
御礼申し上げます

家族一同心より感謝申し上げます
右略儀ながら書中をもってご挨拶とさせていただきます
敬 具

平成十年十月二十八日

田 島 浪 子
田 島 祐 介
田 島 研 介

田島先生お別れの会について

《進行予定》

17:00 受付スタンバイ
17:15 関係者最終打合せ
17:30 受付開始（4階エレベーター前）

・受付区分 ①原子力関係
②立教大学関係
③会社関係
④友人・知人・親族

※受付——名刺を頂く（名刺盆⁴個*ホテルで準備）

名刺をお持ちでない方——芳名簿に記帳（芳名簿*原安協で準備）

筆記具一式*ホテルで準備

※お渡しする物——御礼状、追悼文

17:50 ご遺族、関係者 会場内にスタンバイ

17:55 会場オープン

18:00 開会

・開会の辞（司会）
・田島家よりのご挨拶

18:05 献花——お客様の整理及び誘導（ホテル）

*献花（カーネーション予定）

*献花お渡し係

*お客様を会場内ホワイエ側に誘導、献花の花をお渡しし正面の献花台へ。
献花終了のお客様にドリンクサービス

*献花の流れを見て、一段落ついたところで献花をお待ちいただく。

18:20 ご来賓弔辞

18:20 ①内田 秀雄 様

18:25 ②古市 進 様

18:30 ③浜田 達二 様

18:35 献杯

森 一久 様

— 献杯終了で

・献花の再スタート
・献花終了のお客様にはお食事をすすめる
食事～ご歓談（ブッフエ料理・立食）

19:50 お開き